

冥界で行われた明快な判決

—— 韓国における短編白話小説の受容（続） ——

金 永 昊

【要約】

本稿は、拙論「夢の中で裁判した戦乱の人たち」と「韓国における短編白話小説の受容」に続いて、『古今小説』第三十一卷「閻陰司司馬貌断獄」の韓国における影響作『夢決楚漢訟』についての文学的特質について論じたものである。

まず、『夢決楚漢訟』の判決の方針は、前世での怨みを晴らすことにある。したがって、「閻陰司司馬貌断獄」とは転生する人物が異なる場合が生じるため、その玉突き事故として新たな人物が設けられる場合がある。

次に、「閻陰司司馬貌断獄」では韓信について高く評価しており、否定的な記述はほとんど見られない。しかし、『夢決楚漢訟』では韓信に対して、功績も認めているが、過ちもある人物として評価しており、「閻陰司司馬貌断獄」では登場しない酈食其・龍且・鐘離昧・樵夫のような人物が次々と登場して韓信に対する怨みを訴える。また、「閻陰司司馬貌断獄」では劉邦についても高く評価し、否定的な評価を避けている。しかし、『夢決楚漢訟』では劉邦及び劉邦側の人物は強く非難し、項羽をはじめ、彼の周辺人物については肯定的に評価する傾向が目立つ。

最後に、「閻陰司司馬貌断獄」では「忠」、『夢決楚漢訟』では「義」の思想に焦点が当てられた判決が下される場合

が多いことも、両国の思想史の中で本作を位置づけるうえで極めて重要なものになっていると言えよう。

【目次】

- 一、はじめに
- 二、怨みを晴らすための転生、そして玉突き事故
- 三、歴史認識及び人物評価
- 四、「忠」と「義」の物語
- 五、おわりに

一、はじめに

筆者は以前、拙論「夢の中で裁判した戦乱の人たち」（『東北学院大学教養学部論集』第一八五号、二〇二〇）において、明末の馮夢龍が編纂した『古今小説』第三十一卷「閻陰司司馬貌断獄」、そして日本の都賀庭鐘による翻案作『英草紙』の第五編「紀任重陰司に至り滞獄を断ぐる話」と韓国における影響作『夢決楚漢訟』について紹介したことがある。『夢決楚漢訟』については、①韓信の過ち

も認めている点、②劉邦より項羽のほうを高く評価している点、③徹底的に前世での怨念を晴らすことに焦点が当てられている点、④原作の矛盾を解消し、全体的な辻褄を合わせた点の四点を指摘した後、「これらの点については更に多くの紙幅を費やして検討していかねばならないので、詳細な議論は別稿を期したい」と今後の課題にしておいた。

その後、拙論「韓国における短編白話小説の受容——『古今小説』第三十一卷「閻陰司司馬貌断獄」と『夢決楚漢訟』——」（『和漢比較文学』第六十五号、和漢比較文学会、二〇二〇）において、右の問題について検討する機会が与えられたが、結局のところ、充分に論じることが出来ずに筆を擱いてしまった。そこで本稿では、『夢決楚漢訟』の文学的特質について、拙論で論じ得なかった点を述べることを目的としたい。なお、問題の所在、本文引用のテキスト、全体的な方針などの点については、右に挙げた拙論と同じであることを付言しておく。

二、怨みを晴らすための転生、そして玉突き事故

「閻陰司司馬貌断獄」の先蹤とも言い得る『三国志平話』では、『西漢演義』の人物としては韓信・彭越・英布・劉邦など、『三国志演義』の人物としては曹操・劉備・孫権・諸葛孔明などが登場していた。

しかし、これだけでは物語の構成において物足りないと考えたのか、馮夢龍は「閻陰司司馬貌断獄」で項羽・樊噲・戚氏（『西漢演義』）、関羽・張飛・趙子龍（『三国志演義』）などの人物を新たに加え、『西漢演義』と『三国志演義』でそれぞれ合計二十二人ずつ登場させて物語を展開している。それが『夢決楚漢訟』のほうでは、諸馬武が冥界に至って最初に文書を調べた際に言及した『西漢演義』の人物が七十一人、そのうち、四十二人が訴訟を起こし、判決を受けた人物は五十人である。その過程で、「閻陰司司馬貌断獄」には登場しない張良・范增・虞美人・酈食其・鍾離昧・龍且（『西漢演義』）、呂布・马超・黄忠・袁紹（『三国志演義』）などを含め、原話の二倍を超える人物が登場し、一層豊かな内容を持つ物語に仕立てられている。その中で、「閻陰司司馬貌断獄」とは異なる転生の論理・歴史認識・人物評価・思想の問題が提起されているのは、『夢決楚漢訟』の文学的特質を考えるうえで非常に重要な要素となっている。

『夢決楚漢訟』において、「閻陰司司馬貌断獄」には現れない人物が登場することに関しては次の二つの傾向が考えられる。一つ目は、『西漢演義』や『三国志演義』の中で重要な人物あるいは興味を引く逸話を持つ人物を紹介することによって、物語の内容に一層興味を持たせているということである。例えば、范增は『西漢演義』を語るうえで、項羽の参謀として極めて重要な人物である。范增が項羽を支え続けていたからこそ項羽は数々の戦いで勝利を収め、たと

え敗北をしても生き延びて次の機会を図ることが出来た。しかし、范増が陳平の密告により疑いをかけられ、故郷に帰る途中で死んでしまうと、その後の項羽は垓下の戦いで敗れ、烏江で自害することになる。『夢決楚漢訟』の作者はこのような范増の物語が「閻陰司馬貌断獄」に登場しないことを残念に思ったのか、自作においては范増に項羽を訴えさせている。そして、諸馬武は范増の忠誠を称え、怨みを持つのは当然であるとし、来世（『三国志演義』の世界）では陸遜に生まれ変わるようにする。陸遜は孫権の部下として、関羽（項羽の生まれ変わり）を捕えることによって、前世の怨みを晴らすことになる。

二つ目は、「閻陰司馬貌断獄」とは転生する人物が異なるため、その玉突き事故として新たな人物が設けられる場合があるということである。かつて筆者は、この点に重点を置いて、丁公・樵夫・紀信の訴えを例にして検討したが、ここではそれに続いて、まず、戚氏と如意についての判決と転生の論理について検討してみたい。戚氏は「閻陰司馬貌断獄」において第三裁判に登場し、呂氏を訴える。彼女の訴えは、劉邦の死後、息子の如意が毒酒を飲まされて死に、自分もまた残酷な刑罰を受けて死んだことに対してのものであった。それについての司馬貌の判決を引用すると次の通りである。

又喚戚氏夫人、「①発你在甘家出世、配劉備為正宮。呂氏当初

慕彭王美貌。求淫不遂、又妬忌漢皇愛你、②今断你与彭越為夫婦、使他妬不得也。」

（また、戚氏夫人を呼び、「あなたは甘家に生まれ変わって劉備の正室になる。呂氏は、最初は彭越の美貌を慕って、淫らなことを要求したが出来なかった。また、あなたが漢王に寵愛されるのを妬んだ。今、あなたを彭越と夫婦にならせ、呂氏が妬むことが出来ないようにする。」）

右の引用文を見ると、戚氏に対する司馬貌の判決は①で甘夫人に転生し、劉備の正室になること、②で彭越と夫婦になれば、呂氏は妬まないだろうという二点にまとめることが出来る。まず、①についての『夢決楚漢訟』での改変を見ると、戚氏は甘夫人ではなく麋夫人に生まれ変わるの大きな相違点である。その判決文を引用してみると次の通りである。

あなたは良家の娘で、漢王の金石のような約束だけを信じていた。しかし、結局のところ、絵の餅のようなことになってしまい、呂後の毒手に遭い、子息とともに残酷な禍を蒙ってしまった。とてもかわいそうなことである。あなたを人間の世界に送る際には、再び女子の身とし、名字は麋氏とする。劉備に仕えて、皇后になり、息子を生んで後には皇帝になる。

ここで、麩夫人と甘夫人の関係について整理したい。『三国志演義』では、甘夫人は劉備の正室として二〇七年に阿斗（劉禪）を産み、麩夫人は劉備の第二夫人として常に行動をとみにする。しかし、正史の麩夫人は、金銭と小作人を提供して劉備を経済的に支えた糜竺の妹であり、一九六年に劉備の妻に迎えられるが、その後は記録がほとんどない。『夢決楚漢訟』の作者は、麩夫人が甘夫人より先に劉備の妻になったためか、あるいは、劉備に多大な経済的援助をしている糜竺の妹であるため、妻の中でも地位が高いと考えたためか詳細は未詳だが、いずれにしても麩夫人が劉備の正室というのは、『三国志演義』とは異なる設定である。

一方、「閻陰司司馬貌断獄」のほうでは、戚氏の息子如意は劉禪に生まれ変わり、来世でも甘夫人の息子になるように判決が下される。そして、劉禪は位を継いで四十二年間にわたって富貴を極め、前世の苦しみを埋め合わされるようになる。このように、如意が劉禪に生まれ変わることは、身分的にも同じであり、何より来世においても戚氏と親子関係を維持することに焦点が当てられた判決である。しかし、これは物語の中で「恩將恩報、仇將仇報、分毫不錯（恩將には恩で報い、仇將には仇で報い、少しも誤ることはない）」と語られた判決の方針に忠実に従ったものかというところとは言えない。

そこで、『夢決楚漢訟』の場合、如意の生まれ変わりは劉禪では

なく、「閻陰司司馬貌断獄」には登場しない華歆に設定されている。そして、曹操が伏皇后（呂氏の生まれ変わり）を探す際に、壁の中に隠れていた伏皇后を引きずり出し、苦しませることによって、前世での怨恨を晴らすよう判決が下される。このように、華歆は如意と身分的に一致しないし、生まれ変わっても戚氏と親子関係を維持しないにもかかわらず、『夢決楚漢訟』の作者がここで登場させたのは、徹底的に前世での怨みを復讐することに最大の重点が置かれていた意図があったからである。

次に、②について検討してみよう。「閻陰司司馬貌断獄」では、呂氏が彭越に淫らな要求をしたため、来世では戚氏が彭越と夫婦になれば、呂氏が妬むことは出来ないという判決が下される。もちろん、『三国志演義』の論理では劉備（彭越の生まれ変わり）が甘夫人（戚氏の生まれ変わり）と夫婦であることは常識的なことである。しかし、『西漢演義』の論理では、いくら呂氏が妬むことは出来ないようにするためであっても、彭越と戚氏が来世に夫婦になるのは理解しがたいことである。更に、『夢決楚漢訟』では戚氏を甘夫人ではなく麩夫人に転生させているので、②の判決をそのまま生かすのは不可能なことになってしまう。そこで、『夢決楚漢訟』では②が削除されることによって、全体的な内容に辻褃を合わせていることが分かる。

最後に、顔良と文醜への転生について検討してみよう。まず、二

人の転生について、拙論でまとめたものの一部を紹介すると次の通りである。

●『古今小説』「閻陰司司馬貌断獄」

西漢演義	三國志演義	判決内容・転生の論理
項伯	顔良	項羽に背いて劉邦に向かい、富貴を企んだため、項羽にとっては罪人である。来世では閻羽によって斬られ、前世の項羽の恨みを晴らす。
雍齒	文醜	仇の封爵を受けたため、項羽にとっては罪人である。来世では閻羽によって斬られ、前世の項羽の恨みを晴らす。

●『夢決楚漢訟』

西漢演義	三國志演義	判決内容・転生の論理
李左車	顔良	項羽に偽って降参して九里山に誘引し、楚を滅ぼしたため、項羽に恨まれて当然である。来世では白馬津の戦いで閻羽によって殺される。
田夫	文醜	楚の百姓として項羽に道を間違えて教えた。来世では白馬津の戦いで閻羽によって殺される。
項伯	龐徳	項羽の季父であるにもかかわらず、鴻門の会の時には劉邦が殺されるのを阻止し、張良と密通した。そして、九里山の戦いでは、劉邦に降伏し、後には諸侯に封じられた。したがって、来世では、最初は馬超の武将になるが、後には曹操に降伏し、閻羽によって殺される。

右の表を見れば分かるように、「閻陰司司馬貌断獄」での項伯はその罪が認められ、来世では顔良に転生し、閻羽によって斬られる。

しかし、『夢決楚漢訟』のほうでは、顔良に転生するのは李左車であるため、その玉突き事故として、新たな人物が項伯の生まれ変わりとして設定されなければならない。そこで登場したのが龐徳である。

では、『夢決楚漢訟』のほうでは、なぜ顔良に転生する人物として、わざわざ「閻陰司司馬貌断獄」に登場しない李左車が新たに設けられたのであろうか。項伯は「項羽に背いて劉邦に向かい、富貴を企んだため、項羽にとっては罪人である」というふうには、言わば「不忠」「裏切り」を象徴する人物として評されている。それに対して、李左車の罪は「項羽に偽って降参して九里山に誘引し、楚を滅ぼした」ことにある。つまり、李左車も「不忠」「裏切り」を象徴する人物ではあるものの彼の罪は項羽の死、そして楚が滅ぼされる直接的な原因になったことであり、裏切りの度合い、ひいては項羽が恨みを持つ度合いが項伯より遥かに大きい。つまり、「怨みを晴らす」という『夢決楚漢訟』の執筆方針が一貫したものであるとすれば、項伯ではなく李左車のほうが顔良に転生するのに適切な人物であったのである。そうすると、『夢決楚漢訟』では項伯の生まれ変わりとして、「不忠」「裏切り」を象徴する人物であり、そして閻羽によって殺されるといふ二つの条件を充足する人物を新たに設けなければならない。そこで龐徳は、最初は馬超の武将になっていたが、曹操に降伏し、閻羽によって斬られるので、項伯の生まれ変わりとして

適切な人物であったのである。

一方、雍齒は「仇の封爵を受けた」ことが罪であることぐらいしか書かれておらず、項羽に対しては具体的にどのような怨みを買ったべきことをしたのか記されていない。そのため、『夢決楚漢訟』では雍齒を削除し、文醜に転生する人物として、項羽に道を間違えて教えた田夫を新たに設定している。彼も項羽が減ぼされる重要な原因となった人物で、このような人物の配置も、一貫して怨みを晴らすことに重点が置かれた判決と言えよう。

三、歴史認識及び人物評価

①韓信

「闇陰司司馬貌断獄」に見られる人物評価の特徴の最たるものは、韓信について高く評価しており、否定的な記述がほとんど見られないことである。「闇陰司司馬貌断獄」での韓信に対する判決は次の通りである。

韓信、你尽忠報国、替漢家奪下大半江山、可惜銜冤而死。発你在樵郷曹嵩家托生、姓曹、名操、表字孟德。先為漢相、后為魏王、坐鎮許都、享有漢家山河之半。那時威權盖世、任從你謀報前世之仇。当身不得称帝、明你無叛漢之心。

（韓信よ、あなたは忠を尽くして国に報い、漢家の領土の大半はあなたの力で取った。ところが惜しいことに、無実の罪を着せられ死んでしまった。あなたを樵郷の曹嵩の家に生まれ変わらせ、姓を曹、名を操、字を孟徳とする。初めは漢の宰相になり、後に魏の王となって、許都の守となり、漢家の山河の半分をあなたの物とする。そうならば、あなたの権威は世に並ぶ者がなく、思いの通りに前世の仇を報ずることが出来る。あなた自身は帝と称することはできないが、これはあなたが漢に背く気持ちがないことを明らかにするものである。）

「闇陰司司馬貌断獄」では合計四回にわたって裁判が行われるが、第二裁判は劉邦に対する丁公の訴え、第三裁判は呂氏に対する戚氏の訴え、第四裁判は六将に対する項羽の訴えというふうに訴訟関係が比較的単純である。それに対して、第一裁判での韓信は、劉邦・呂氏・蕭何・蒯通・許負を訴えており、それに加えて彭越と英布も登場している。したがって、第一裁判が「闇陰司司馬貌断獄」全体において最も中核をなして議論が行われているところで、その中でも主人公は韓信であると言っても過言ではない。そして、韓信に対する判決は、右の引用文からも分かるように、謀反を起こすつもりはなかったこと、つまり「忠」に主眼を置いて述べられており、逆に韓信が訴えられることはない。

それに対して、『夢決楚漢訟』では韓信に対して、「蓋世之功」があったにもかかわらず、「王侯之楽」を極めることが出来なかったことは残念であると功績も認めているが、過ちもある人物として評価している。まず、物語は劉邦が韓信・彭越・英布を訴える場面から始まり、「闇陰司司馬貌断獄」には登場しない酈食其・龍且・鐘離昧・樵夫(注2)のような人物が次々と登場して韓信に対する怨みを訴える。そして、『三国志演義』の世界では周瑜・趙子龍・马超・諸葛孔明に生まれ変わり、曹操（韓信の生まれ変わり）に対して復讐をすることに。特に、「怨みの復讐」という観点から見た場合、作品全体を通して最大の怨みを持つ人物は、韓信に道を教えてあげたにもかかわらず殺された樵夫である。そして、樵夫は『三国志演義』の世界では諸葛孔明に転生し、赤壁の戦いで曹操の軍隊を破るることによって、前世での韓信への怨みを徹底的に晴らすことになる。このように、『夢決楚漢訟』では韓信の過ちに対してもそれに相応しい処罰は受けるべきであったと評価しているのである。

② 劉邦と項羽

「闇陰司司馬貌断獄」に見られる韓信の評価は、劉邦と項羽の訴え及び判決とも深く関わっている。まず、劉邦の場合、韓信による訴えと判決の中で「因前世君負其臣、来生臣欺其君以相報（前世で君主としてその臣下に背いたため、来生では臣下が君主を欺いて、

その怨みを晴らす）」と、その過ちが簡単に記されているのみである。また、丁公が劉邦を訴える第二裁判においても、その転生の論理は丁公の裏切り、つまり「不忠」に焦点が当てられ、周瑜に転生するというような判決が下される。したがって、せっかく劉邦を訴えた意味はどこにあったのか、その怨みはどのようにして解消されたかに関しては疑問が残る。つまり、劉邦については全体的に否定的な評価を避けているような印象が見受けられる。

しかし、『夢決楚漢訟』では、項羽をはじめ、虞美人・虞子期・烏江の亭長・周蘭・桓楚など、彼の周辺人物についても肯定的に評価する傾向が目立つのに対して、劉邦については「父子の倫」「夫婦の倫」「君臣の倫」の三綱の倫理を犯していることをはじめ、二頁にわたって彼の行為について強く非難する。更に、灌嬰・田夫・李左車などの劉邦側の人物や、項羽が敗北する直接・間接的な原因となった人物についても同じく否定的に評価している。したがって、劉邦は、来世では献帝に転生し、曹操から苦しめられた後、曹丕に天子の位を奪われるというような判決が下され、「闇陰司司馬貌断獄」とは異なる人物評価の様相が見られる。

「闇陰司司馬貌断獄」では韓信と劉邦についての否定的な評価を避けている傾向があるため、項羽は怨恨を持って当然とも言える二人を訴えることはない。その代わり、第四裁判において、自分の死体を分け合って手柄にした六人の將軍を訴えるという簡略な訴訟を

行うが、これはあくまで付け足しと言っても過言ではない。しかし、『夢決楚漢訟』の場合、項羽について李明九氏が「『夢決楚漢訟』研究—中国話本小説との対比を中心に—」（『成大論文集』第三十三輯、成均館大学校論文集、一九八三）で、

項羽を呼ぶのではなく、請じて迎え入れることになっている。それだけでなく、呼称も「大王」とし、また、尊敬語を使っている。一方、各人物に対する判決は新旧本（金注：『夢決楚漢訟』）の場合、平均的に半頁程度であるが、項羽についてはなんと五頁を割愛している。まず、項羽の雄大な気性から褒め称えはじめ、鴻門の会の話、睢水の戦いで漢王の百万大兵を破り、〈中略〉両本が項羽を同じく関羽に転生させてはいるものの、新旧本は特に項羽、つまり関羽について力説していることが分かる。

と述べている通り、英雄として高く評価している。これは河允燮氏が「『項羽』についての記憶の変化と朝鮮後期の文学的再現」（『古典と解釈』第二十二輯、古典文学漢文学研究学会、二〇一七）で「項羽についての肯定的な認識が朝鮮後期の文学の場の中で、国文と漢文、詩歌と小説を含め、広い範囲で発見され」と述べているように、当時における項羽についての認識が反映されたものと言えよう。

このような認識は、子嬰についての判決においても同じである。

「閻陰司司馬貌断獄」のほうを見ると、

項羽不合殺害秦王子嬰、火烧咸陽、二人都注定凶死。
（項羽はあいにく秦王の子嬰を殺害してしまった。また、咸陽を焼き払ったため、二人（金注：項羽と樊噲）はともに無残な死に方をすることが決まっている。）

と、項羽は子嬰を殺害したことにより、来世においても無残な死に方をするという判決が下される。しかし、『夢決楚漢訟』での子嬰は項羽を訴えてはいるものの、

大王は秦王になってから四十六日目で沛公に降服し、あわれにも項羽の手によって殺された。世の中に出ては漢国の劉禪になつて、西蜀で四十二年間にわたつて帝業を成し遂げるようにする。

と、前世で王であったため、後世においても同じ身分の王になるとに重点が置かれている。したがって、子嬰は劉禪に転生しており、関羽に怨みを晴らすような内容になっていない。一方で、項羽に対する判決においては、秦王子嬰を殺し、始皇帝の墓を暴いたことについて、先祖の怨念を晴らしたことになるため、充分な理由があつ

てのことであるとする。これは、諸馬武が項羽を「大王」として崇め、敬意を払う態度まで取っていることから、彼に対する評価の一貫性を保つために怨念を晴らすような相手としての設定を避けたためであろう。

③樊噲

樊噲は「閹陰司馬貌断獄」、「夢決楚漢訟」ともに転生して張飛に生まれ変わる。豪快な人と言えば、『西漢演義』では樊噲、『三国志演義』では張飛ということ、中韓ともに同様の認識をしていたためであろう。そして、両作品ともに樊噲は訴える対象がいないため、怨恨を晴らすための転生ではなく、主君を忠実に補佐した功績が高く評価されて転生することになる。

しかし、判決内容を比較してみると相違点が見られる。「閹陰司馬貌断獄」のほうでは、

樊噲不合縦妻呂須幫助呂后為虐、妻罪坐夫。〈中略〉二人都注
定凶死。但樊噲生前忠勇、并無諂媚。〈中略〉注定来生俱義勇剛
直、死而為神。

（樊噲は、あいにくも妻呂須が呂后を助けて残虐な振る舞いをするのを放っておいた。そのため、妻の罪に連座させられる。〈中略〉）二人（金注・項羽と樊噲）はともに無残な死に方をするこ

とが決まっている。ただし、樊噲は生前に忠勇で、人に媚びへつらわなかった。〈中略〉来世においても二人ともに義勇剛直で、死んでは神になることが運命付けられている。）

と、妻呂須の振る舞いに連座させられ、無残な死に方をするという否定的な内容と、人に媚びへつらわず、義勇剛直で、死んでは神になるという肯定的な内容が同時に記されている。それに対して、『夢決楚漢訟』での樊噲に対する判決内容を引用すると次の通りである。

あなたは熊虎のような將軍である。鴻門の会に入って沛公の危機を救う時には、頭髮が上を向いて立ち、目つきは裂けるようだった。一言で項羽を責め、敢えて沛公を害することを防いだため、どうして壮快ではないと言えようか。また、何回も戦って、その功烈が浩大であるため、実に美しい限りである。世の中に出て生まれ変わっては、姓名は張飛、字は翼徳になる。長坂橋の上で大喝一声し曹操の百万大兵を破る時には、上將夏侯傑は落胆喪魂して馬から落ちる。西川を攻撃する際には巴郡に至って、義をもって嚴顔を釈放し、郡県を過ぎる時には、人々が遠くより仰ぎ従って服従する。これは他の人では到底なし得ないことである。また、計略によって魏国の名將張郃を破り、瓦口関を取って、ようやく劉玄德が漢中を手に入れ、帝業を成

し遂げるようにし、あなたの名前が天下に轟くようになる。

右の引用文を見ると、『夢決楚漢訟』では「閻陰司司馬貌断獄」にあった樊噲についての否定的な内容が省かれていることが分かる。そして、鴻門の会での樊噲の「功烈」を紹介し、張飛に生まれ変わっては長坂橋の戦いにおいて曹操の百万大軍を撃破したことをはじめ、劉備が漢中を手に入れ、帝業を成し遂げられるように補佐したという説明が長く続いている。このような書き方は、判決文という全体的な文脈から脱線し、読者に対して樊噲と張飛について分かりやすく説明し、作品について興味を持たせようとしたことに主眼が置かれたものである。これはかつて拙論でも述べたように、知識の伝授という特徴を備えた、日本の「仮名草子」と同様の性格を持つ作品が韓国文学史上に流行したことを示す、典型的な例である。

四、「忠」と「義」の物語

「閻陰司司馬貌断獄」と『夢決楚漢訟』を貫く思想には、『西漢漢義』の人物が『三国志演義』の人物に生まれ変わるという輪廻転生、怨みを晴らすための転生という因果応報、その他にも天命思想や道教思想など、様々な要素が混合されている。これらの思想は明確な思想的根拠に基づいての設定というより、多くの思想が混合された

民間信仰の影響と考えたほうが妥当であると考えられる。

一方、『夢決楚漢訟』では意図的に「閻陰司司馬貌断獄」とは異なる思想が提示されている例も見受けられる。例えば、丁公が劉邦を訴えた場面を見ると、劉邦は丁公を「臣として不忠なる者を戒めるため（為臣不忠者之戒）」に殺したとする。それによって、丁公は周瑜に生まれ変わることにより、前世では項羽に仕え通すことが出来ず、来世でも孫権に仕え通すことが出来ないというような判決が下される。つまり、「閻陰司司馬貌断獄」では丁公の訴えが認められず、彼の「不忠」「裏切り」に焦点が当てられた判決が下された。それに対して、『夢決楚漢訟』のほうでは、「不忠」についての議論より重要なのは丁公が持つ怨念であるため、彼が怨みを晴らすことに焦点が当てられた判決になる。したがって、丁公の訴えは認められて王朗に転生し、猷帝（劉邦の生まれ変わり）に復讐をすることになる。

「閻陰司司馬貌断獄」における英布の主張を見ても、謀反を起そうとしたことがないという「忠」の思想が顕著に見られる。そして、呂氏から彭越の肉醬が届いた時には激怒して使者を殺し、それによって呂氏から不興を買って殺されたことを訴えている。つまり、使者を殺したことは、英布自身の感情的な行動に起因する。それに対して、『夢決楚漢訟』の英布の主張を引用してみると、

漢王は罪のない韓信と彭越を殺し、彭越の肉醬を諸侯に分けて与えました。これがどうして功臣をもてなすための義と言えるのでしょうか。

と、「義」の論理が重要視されている。その他にも、韓信の訴えに対する蕭何の弁明においても、功績のある韓信を殺すことは「義」ではないため反対したことが記され、判決においては蕭何の「無信無義」を戒めるとする。そして、義帝には「仁義」、田横には「義士」、周蘭と桓楚には「忠義」、劉邦を批判する時には「義」にかこつけた行為、三老董公には君臣の「大義」を明らかにしたこと、張飛は「義」をもって厳顔を釈放したというふうに、「義」の論理が何度も提示され、非常に重要な価値観として物語の随所に現れている。このような思想の違い及び当時における「忠」と「義」の認識に関しては、筆者の狭い見識では回答をすることが出来ないもので、さしあたり、問題の所在のみを提示するに留めたい。

五、おわりに

『西漢演義』の人物が冥界で訴訟を起こし、明快な判決によって『三国志演義』の人物に生まれ変わって、前世の怨みを晴らすという話は『新編五代史平話』『梁氏平話』、『三国志平話』、『古今小説』「鬧

陰司司馬貌断獄」など、中国では古くから人気を集めた素材であった。これが日本においては、都賀庭鐘の『英草紙』第五編「紀任重陰司に至り滞獄を断くる話」によって源平合戦時代の人物が冥界で訴訟を起こし、明快な判決によって南北朝時代の人物に転生するという完全に日本化が図られた翻案作が生み出された。そして、韓国では、「鬧陰司司馬貌断獄」より二倍以上の人物が登場して冥界で訴訟を起こす『夢決楚漢訟』が作られた。

それでは、何をもって「明快」な判決と言えるのだろうか。それは、日中韓の文化的な背景が異なるため、「明快」の語が持つ意味も異なってくる。このような問題意識の中で、本稿では（はじめに）で紹介した拙論の続きとして、『夢決楚漢訟』から見られる判決の内容を基に「明快」な判決とは何かについて検討した。次の課題は、拙論で「いかなる形で自国の風土に合わせて「日本化」「韓国化」が行われたのかを究明することが、両国の文学研究において大きな課題の一つ」と述べた通り、日本と韓国における中国短編白話小説の受容の様相を比較し、「両国の受容史を相対化して理解する」ことによって、その独自性や特質を究明することである。

【注】

〔注1〕 劉邦が訴える相手ははっきりと明記されていないが、拙論で「天下統一の後、各将軍の功績に対し多大な俸禄を与

えたにもかかわらず、臣下としての道を弁えず、謀反の心を起こし、誅せられた後にも訴訟を起こした」とまとめた通り、劉邦は韓信・彭越・英布に対して訴えていることが分かる。

〔注2〕 「闇陰司馬貌断獄」での樵夫は、韓信の寿命が縮まった理由の一つとして述べられるだけで、韓信を訴えることはない。

〈参考文献〉

- 池松旭 『古代小説 夢決楚漢訟』（新田書林、一九一四）
- 李明九 『夢決楚漢訟』研究——中国話本小説との対比を中心に——（『成大論文集』第三十三輯、成均館大学校論文集、一九八三）
- 金永昊 「夢の中で裁判した戦乱の人たち」（『東北学院大学教養学部論集』第一八五号、二〇二〇）
- 「韓国における短編白話小説の受容——『古今小説』第三十一卷「闇陰司馬貌断獄」と『夢決楚漢訟』——」（『和漢比較文学』第六十五号、和漢比較文学会、二〇二〇）
- 柴田清継 『古今小説』卷三十一「闇陰司馬貌断獄」訳注（『火鍋子』第四十二号、翠書房、一九九九）
- 河允燮 「項羽」についての記憶の変化と朝鮮後期の文学的再現（『古典と解釈』第二十二輯、古典文学漢文学研究学会、二〇一七）
- 馮夢龍編 『全像古今小説（下）』（福建人民出版社、一九八〇）
- 〔付記〕 本稿はJSPS科研費、基盤研究C「日韓両国における中国短編白話小説の受容様相比較研究」（18K00510）の助成を受けた成果の一部である。